

健康障害のある高齢者対象の看護学実習における学生の自己評価

－ ルーブリック評価尺度使用の有無による自己評価の比較 －

長井 栄子*¹ 高木 初子*² 木村 峰子*³

Self-evaluation of nursing students in clinical practice for the elderly with health disorders

Comparison of self-evaluation based on whether or not rubric scale is used

NAGAI, Eiko, TAKAGI, Hatsuko and KIMURA, Mineko

要旨

健康障害のある高齢者対象の看護学実習でのパフォーマンス評価として、ルーブリック評価尺度使用の有無で実習前後の学生の自己評価を比較した。対象は当該実習を受講した学生84名の実習に対する自己評価表で、データ収集期間は2016年10月～2017年2月であった。Wilcoxonの符号付き順位検定を行った結果、実習前後の学生の自己評価はルーブリック評価尺度使用の有無を問わず全項目で有意に向上した。ルーブリック評価尺度使用の有無による評価を比較したところ、加齢や疾病の理解、コミュニケーション以外の項目で有意差を認めた。有意差を認めた評価項目は抽象度が高いか、対象高齢者によって援助実施が難しい項目であり、肯定的評価がしづらかった可能性があった。ルーブリック評価尺度ではカンファレンスでの意見交換を含む学生の学習姿勢を評価基準としたことから、学生の努力によって自己評価が向上しやすかったものと考えられた。

キーワード

自己評価, ルーブリック評価, 看護学生, 臨地実習, 高齢者

Abstract

As a performance evaluation of clinical practice for the elderly with health disorders, the self-evaluation of nursing students before and after the practice was compared with whether or not the rubric scale was used. The subjects were 84 students who took the self-assessment tables for the practice, and the data collection period was from October 2016 to February 2017.

The results showed that the self-evaluation of the students before and after the practice had significantly improved on all items regardless of whether or not the rubric scale was used. When comparing the evaluation based on the use of the rubric scale, a significant difference was recognized in the items other than age, disease understanding, and communication. Evaluation items that showed a significant difference were high in the abstraction level or were difficult to care for depending on the elderly person in charge, and there was a possibility that it was difficult to make a positive evaluation. Since the rubric scale was based on the student's learning attitude including the exchange of opinions at conferences, it was thought that self-evaluation was easy to improve by student's efforts.

Key words

self-evaluation, the rubric scale, nursing students, clinical practice, the elderly

I. はじめに

看護師は知識や技術を対象となる人に提供するうえで様々な状況に即した判断をし、それに基づく行動が求められる。状況に合わせた判断や行動の修得状況を評価するには適切なパフォーマンス評価が必要である。知識や技術を総合的に活用した結果生み出される看護を質的に評価するパフォーマンス評価は看護基礎教育における評価として注目されている(石川2014)。

筆者らはこれまで看護学の演習や実習における学生のパフォーマンス評価を学生の記録や教員による評価内容等により検討してきた(高木2003,長井ら2012)。そのなかでどの教員においても同様の評価視点を持てるよう評価基準およびその評点を

作成する試みを2010年より行ってきた。作成に当たっては老年看護学を専門とする教育者複数名で討議を重ねた。当初4段階評価であったものを5段階評価とし、何を評価の対象とするのかを明記して現行のルーブリック評価尺度とした。これまでは教員のみが評価基準としてこれを使用し学生の実習評価を行ってきた。しかし学生自身がルーブリック評価尺度を使用し自己評価を行うことで、自身を適切に評価し、学習効果を上げる助けとなると考えた。

今回、健康障害のある高齢者に対する看護学実習のパフォーマンス評価として、ルーブリック評価尺度を用いて実習前後での学生の自己評価を確認した。一方、従来の実習評価票(表1)

* 1 : 聖徳大学看護学部看護学科・准教授 / * 2 : 聖徳大学看護学部看護学科・教授 / * 3 : 聖徳大学看護学部看護学科・講師

表1 従来の実習評価票

評価項目	評価内容	学生評価	教員評価
1. 疾病や治療、ケアが老年期にある人にどのような影響を与えているかを理解する。	1) 加齢に伴う身体的、心理的变化が理解できた。		
	2) 疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定ができた。		
2. 老年期にある人の発達段階、健康状態、生活史・背景、価値観を考慮した援助の必要性を理解する。	1) 老年期にある人のコミュニケーションの特性が理解できた。		
	2) 家庭や社会における役割と生きがいについて理解できた。		
3. 退院後の生活に向けた援助の必要性を理解し、老年期にある人やその家族が生活の自立に向けた知識や技術を習得できるよう援助する。	1) 老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助を行うことができた。		
	2) 日常生活自立のために必要な援助と、その人の自立度に応じた援助を行うことができた。		
	3) 老年期にある人にとっての家族の意味の理解と本人及び家族への支援を行うことができた。		
	4) 効果的な社会資源の活用に向けた援助を行うことができた。		
4. 老年期にある人やその家族の退院後の生活に向けた他部門、他機関との協働の必要性を理解する。	1) 関連職種の役割・機能について理解することができた。		
	2) 在宅サービスの種類及びその役割・機能について理解することができた。		
5. 倫理的に配慮した援助を行う。	1) プライバシーに配慮した援助を行うことができた。		
	2) 老年期にある人の意思、主体性を尊重した援助を行うことができた。		
6. 実習態度	積極的に実習に取り組むことができた。		
【最も評価したいこと】 一学生一	【最も評価したいこと】 一教員一		
出席状況 : 欠席 日, 遅刻/早退 日	総合評価 :		

S : 大変よくできた A : よくできた B : できた C : だいたいできた D : できなかった

も用いて学生自身の成績評価を確認したところ、同様の評価項目であるにもかかわらず、ルーブリック評価尺度を用いた場合と用いなかった場合で評価が著しく異なる印象を受けた。

そこで本研究においてルーブリック評価尺度使用の有無で学生の自己評価がどう変わるのか、その原因とともにこのことが学習にどのような影響を及ぼすのか、今後の教育活動の改善点を見い出したいと考えた。

II. 用語の操作的定義

ルーブリック評価尺度：ルーブリック評価とは学習活動に応じたより具体的な到達目標(評価指標)を示したものであり、目標だけを示し基準が一つだけのものを採点指針ルーブリック、評価指標に即した評価基準(どの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴の記述)をマトリクスで示した配点表を用いたものを3-5段階ルーブリックという(ダネルら2015, 沖2014)。日本では2013年に中央教育審議会答申で例として示された3-5段階ルーブリックを示すことが多いため、本研究においてもマトリクスで示した配点表を用いたことがわかるようルーブリック評価尺度と表現した(表2)。

III. 研究方法

1. 研究対象

健康障害のある高齢者対象の看護学実習を受講した学生84名のうち、本研究に同意の得られた学生84名(回収率100%)の実習に対する自己評価表(実習評価票およびルーブリック評価尺度による実習前後評価)を対象とした。

2. データ収集期間および方法

データ収集期間は、2016年10月～2017年2月とした。方法は、当該実習開始時にルーブリック評価の目的を説明し実習前の自己評価を記載してもらい、実習終了時に再度説明し実習後の自己評価を記載し提出されたものをデータとした。また、比較対象として実習終了時に通常記載する実習評価票を用いた(実習評価票の記載の順序は特に指定せず学生の任意の順序とした)。なお、従来の実習評価票で示された評価はS(大変よくできた)→5点、A(よくできた)→4点、B(できた)→3点、C(だいたいできた)→2点、D(できなかった)→1点に換算して得点化した。

3. 分析方法

分析は、SPSS statistics Base 24を用いてノンパラメトリック検定を行い、実習前後評価およびルーブリック評価尺度使用の有無による変化、学生評価と教員評価との差について分析した。

表2 自己評価に用いたルーブリック評価尺度(一部抜粋)

到達目標	自己評価					回答欄
	1	2	3	4	5	
家庭や社会における役割、生きがいについて考え接することができる。	繰り返し助言を受けるが達成は困難である。	繰り返し助言を受けることで、家庭や社会における役割、生きがいについて理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で一部を示すことができ、高齢者と接することができる。	繰り返し助言を受けることで、家庭や社会における役割、生きがいについて考察し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、高齢者と接することができる。	助言を受けることで、家庭や社会における役割、生きがいについて考察し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、高齢者と接することができる。	主体的に、家庭や社会における役割、生きがいについて考察し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、高齢者と接することができる。	前
						後
老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助を行うことができる。	繰り返し助言を受けるが達成は困難である。	繰り返し助言を受けることで、老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の必要性について理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で一部を示すことができ、援助を行うことができる。	繰り返し助言を受けることで、老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の必要性を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができる。	助言を受けることで、老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の必要性を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、援助を行うことができる。	主体的に、老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の必要性を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、援助を行うことができる。	前
						後
老年期にある人にとっての家族の意味の理解と本人及び家族への支援を行うことができる。	繰り返し助言を受けるが達成は困難である。	繰り返し助言を受けることで、老年期にある人の家族の意味を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で一部を示すことができ、支援を行うことができる。	繰り返し助言を受けることで、老年期にある人にとっての家族の意味を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、本人や家族の支援を行うことができる。	助言を受けることで、老年期にある人にとっての家族の意味を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、本人や家族の支援を行うことができる。	主体的に、老年期にある人にとっての家族の意味を理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、本人や家族の支援を行うことができる。	前
						後
効果的な社会資源の活用に向けた援助を行うことができる。	繰り返し助言を受けるが達成は困難である。	繰り返し助言を受けることで、効果的な社会資源の活用について理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で一部を示すことができ、援助を行うことができる。	繰り返し助言を受けることで、効果的な社会資源の活用について理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、援助を行うことができる。	助言を受けることで、効果的な社会資源の活用について理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、援助を行うことができる。	主体的に、効果的な社会資源の活用について理解し、実習の姿勢、実習記録用紙、各レポート、カンファレンスの中で示すことができ、援助を行うことができる。	前
						後

分析過程は、研究者間で議論を重ね、妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

対象者には本研究の主旨および個人情報の保守、研究協力の有無が成績には影響しないことについて文書および口頭による説明を行ったうえで、研究協力の承諾(同意書の記載)の得られた者に協力を依頼した。また、記録物は鍵付きの保管庫で管理し、個人情報の保護に努めた。なお、本研究は聖徳大学倫理審査委員会の承認を得て行った(受付番号H29U033)。

IV. 研究結果

1. 従来の実習評価票による実習前後評価の変化

従来の実習評価票による当該実習後評価を、ルーブリック評価尺度を用いて収集した実習前評価と比較した。評価項目(評価内容)ごとの実習前後の平均値の変化、有意水準を示した(表3)。Wilcoxonの符号付き順位検定を行った結果、実習前後での学生の自己評価は全項目で有意に向上した。

評価項目ごとの平均値を見ると、実習前評価では、「できる」と判断した3点を下回る項目が多く、上回る項目としては「老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解(3.17±0.67)」「関連職種役割・機能の理解(3.06±0.78)」「プライバシーに配慮した

援助の実施(3.93±0.82)」「老年期にある人の意思、主体性を尊重した援助の実施(3.36±0.74)」であった。しかし「よくできる」と判断した4点を上回る項目はなかった。

一方、実習後評価では、「できた」と判断した3点を下回る項目は「効果的な社会資源の活用に向けた援助の実施(2.77±0.69)」「在宅サービスの種類及びその役割・機能の理解(2.89±0.66)」の2項目のみとなった。さらに「よくできた」と判断した4点を上回る項目は「加齢に伴う身体的、心理的変化の理解(4.01±0.78)」「老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解(4.43±0.66)」「老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の実施(4.15±0.74)」「日常生活自立のために必要な援助と、その人の自立度に応じた援助の実施(4.17±0.60)」「プライバシーに配慮した援助の実施(4.62±0.62)」「老年期にある人の意思、主体性を尊重した援助の実施(4.38±0.69)」の6項目となった。

2. ルーブリック評価尺度使用による実習前後評価の変化

ルーブリック評価尺度を用いた当該実習前後評価について、評価項目(評価内容)ごとの実習前後の平均値の変化、有意水準を示した(表4)。Wilcoxonの符号付き順位検定を行った結果、実習前後での学生の自己評価は全項目で有意に向上した。

また、ルーブリック評価尺度を用いた実習後評価について評

表3 従来の実習評価票による実習前後評価の変化(実習前評価はルーブリック評価尺度データを使用)

評価項目	評価内容	実習前評価 (平均値±標準偏差)	実習後評価 (平均値±標準偏差)
疾病や治療, ケアの老年期にある人への影響の理解	加齢に伴う身体的, 心理的变化の理解	2.99±0.72	4.01±0.78***
	疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定	2.73±0.65	3.98±0.71***
老年期にある人の発達段階, 健康状態, 生活史・背景, 価値観を考慮した援助の必要性の理解	老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解	3.17±0.67	4.43±0.66***
	家庭や社会における役割と生きがいの理解	2.90±0.67	3.60±0.75***
退院後の生活に向けた援助の必要性の理解, 老年期にある人やその家族の生活自立に向けた知識や技術習得への援助	老年期にある人の生活習慣, 自己決定を尊重した援助の実施	2.81±0.63	4.15±0.74***
	日常生活自立のために必要な援助と, その人の自立度に応じた援助の実施	2.96±0.64	4.17±0.60***
	老年期にある人にとっての家族の意味の理解と本人及び家族への支援	2.75±0.74	3.45±0.87***
	効果的な社会資源の活用に向けた援助の実施	2.42±0.64	2.77±0.69**
老年期にある人やその家族の退院後の生活に向けた他部門, 他機関との協働の必要性の理解	関連職種の役割・機能の理解	3.06±0.78	3.87±0.72***
	在宅サービスの種類及びその役割・機能の理解	2.58±0.70	2.89±0.66**
倫理的に配慮した援助の実施	プライバシーに配慮した援助の実施	3.93±0.82	4.62±0.62***
	老年期にある人の意思, 主体性を尊重した援助の実施	3.36±0.74	4.38±0.69***

** P<.01, ***P<.001

表4 ルーブリック評価尺度使用による実習前後評価の推移

評価項目	評価内容	実習前評価 (平均値±標準偏差)	実習後評価 (平均値±標準偏差)
疾病や治療, ケアの老年期にある人への影響の理解	加齢に伴う身体的, 心理的变化の理解	2.99±0.72	4.14±0.73***
	疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定	2.73±0.65	4.01±0.78***
老年期にある人の発達段階, 健康状態, 生活史・背景, 価値観を考慮した援助の必要性の理解	老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解	3.17±0.67	4.44±0.75***
	家庭や社会における役割と生きがいの理解	2.90±0.67	3.83±0.74***
退院後の生活に向けた援助の必要性の理解, 老年期にある人やその家族の生活自立に向けた知識や技術習得への援助	老年期にある人の生活習慣, 自己決定を尊重した援助の実施	2.81±0.63	4.31±0.75***
	日常生活自立のために必要な援助と, その人の自立度に応じた援助の実施	2.96±0.64	4.38±0.66***
	老年期にある人にとっての家族の意味の理解と本人及び家族への支援	2.75±0.74	3.79±0.78***
	効果的な社会資源の活用に向けた援助の実施	2.42±0.64	3.25±0.78***
老年期にある人やその家族の退院後の生活に向けた他部門, 他機関との協働の必要性の理解	関連職種の役割・機能の理解	3.06±0.78	4.11±0.75***
	在宅サービスの種類及びその役割・機能の理解	2.58±0.70	3.33±0.79***
倫理的に配慮した援助の実施	プライバシーに配慮した援助の実施	3.93±0.82	4.75±0.58***
	老年期にある人の意思, 主体性を尊重した援助の実施	3.36±0.74	4.58±0.65***

***P<.001

評価項目ごとの平均値を見ると、「できた」と判断した3点を下回る項目は全くなかった。さらに「よくできた」と判断した4点を上回る項目は8項目となり、「加齢に伴う身体的, 心理的变化の理解(4.14±0.73)」「老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解(4.44±0.75)」「老年期にある人の生活習慣, 自己決定を尊重した援助の実施(4.31±0.75)」「日常生活自立のために必要な援助と, その人の自立度に応じた援助の実施(4.38±0.66)」「プライバシーに配慮した援助の実施(4.75±0.58)」「老年期にある人の意思, 主体性を尊重した援助の実施(4.58±0.65)」に加えて、「疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定(4.01±0.78)」「関連職種の役割・機能の理解(4.11±0.75)」の評価が向上した。

3. ルーブリック評価尺度使用の有無による評価の比較

当該実習終了時の学生の自己評価について, ルーブリック評

価尺度を用いた際の評価点と従来の実習評価票における評価点を比較した。評価項目(評価内容)ごとのルーブリック評価尺度と従来の実習評価票の評価の平均値の変化, 有意水準を示した(表5)。Wilcoxonの符号付き順位検定を行った結果, 「加齢に伴う身体的, 心理的变化の理解」「疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定」「老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解」の3項目以外の項目で有意差をみとめた。

4. 実習終了時の学生と教員の評価の比較

当該実習終了時の学生の自己評価と教員の評価を比較した。なお, 比較した評価点はいずれも従来の実習評価票における評価点とした。評価項目(評価内容)ごとの評価の平均値, 有意水準を示した(表6)。Wilcoxonの符号付き順位検定を行った結果, 「家庭や社会における役割と生きがいの理解」「老年期にある人の生活習

表5 ルーブリック評価尺度使用の有無による評価の比較

評価項目	評価内容	ルーブリック 評価尺度使用 (平均値±標準偏差)	従来の評価票 (平均値±標準偏差)
疾病や治療、ケアの老年期にある人への影響の理解	加齢に伴う身体的、心理的变化の理解	4.14±0.73	4.01±0.78
	疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定	4.01±0.78	3.98±0.71
老年期にある人の発達段階、健康状態、生活史・背景、価値観を考慮した援助の必要性の理解	老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解	4.44±0.75	4.43±0.66
	家庭や社会における役割と生きがいの理解	3.83±0.74	3.60±0.75*
退院後の生活に向けた援助の必要性の理解、老年期にある人やその家族の生活自立に向けた知識や技術習得への援助	老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の実施	4.31±0.75	4.15±0.74*
	日常生活自立のために必要な援助と、その人の自立度に応じた援助の実施	4.38±0.66	4.17±0.60**
	老年期にある人にとっての家族の意味の理解と本人及び家族への支援	3.79±0.78	3.45±0.87**
	効果的な社会資源の活用に向けた援助の実施	3.25±0.78	2.77±0.69***
老年期にある人やその家族の退院後の生活に向けた他部門、他機関との協働の必要性の理解	関連職種役割・機能の理解	4.11±0.75	3.87±0.72**
	在宅サービスの種類及びその役割・機能の理解	3.33±0.79	2.89±0.66***
倫理的に配慮した援助の実施	プライバシーに配慮した援助の実施	4.75±0.58	4.62±0.62*
	老年期にある人の意思、主体性を尊重した援助の実施	4.58±0.65	4.38±0.69**

* P<.05, **P<.01, ***P<.001

表6 実習終了時の学生と教員の評価の比較

評価項目	評価内容	学生評価 (平均値±標準偏差)	教員評価 (平均値±標準偏差)
疾病や治療、ケアの老年期にある人への影響の理解	加齢に伴う身体的、心理的变化の理解	4.01±0.78	4.07±0.69
	疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定	3.98±0.71	4.11±0.78
老年期にある人の発達段階、健康状態、生活史・背景、価値観を考慮した援助の必要性の理解	老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解	4.43±0.66	4.57±0.61
	家庭や社会における役割と生きがいの理解	3.60±0.75	3.76±0.61*
退院後の生活に向けた援助の必要性の理解、老年期にある人やその家族の生活自立に向けた知識や技術習得への援助	老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の実施	4.15±0.74	4.38±0.68**
	日常生活自立のために必要な援助と、その人の自立度に応じた援助の実施	4.17±0.60	4.29±0.65
	老年期にある人にとっての家族の意味の理解と本人及び家族への支援	3.45±0.87	3.58±0.68
	効果的な社会資源の活用に向けた援助の実施	2.77±0.69	2.88±0.39
老年期にある人やその家族の退院後の生活に向けた他部門、他機関との協働の必要性の理解	関連職種役割・機能の理解	3.87±0.72	3.87±0.58
	在宅サービスの種類及びその役割・機能の理解	2.89±0.66	3.00±0.47
倫理的に配慮した援助の実施	プライバシーに配慮した援助の実施	4.62±0.62	4.65±0.55
	老年期にある人の意思、主体性を尊重した援助の実施	4.38±0.69	4.46±0.59

* P<.05, **P<.01

慣、自己決定を尊重した援助の実施」の2項目で有意差をみとめた。

V. 考察

1. 実習前後での自己評価の変化と前後評価の必要性

今回、健康障害のある高齢者に対する看護学実習のパフォーマンス評価として、ルーブリック評価尺度を用いて実習前後での学生の自己評価を確認した。これまでは、学生の自己評価の機会が当該実習終了時のみであったため、実習前の学生の自己評価を見る機会はなく、実習前後で有意に自己評価が向上していることを把握する機会がなかった。実習後の評価のみを行っている、学生も教員もどれだけ向上したかという視点よりも、まだできていない項目はどこかに着目しやすいと考えられる。したがって、実習前後で評価することは学生にとっては実習による自身の学習成果を実感し、次の学習に向かうモチベーショ

ンを高めることに繋がるであろう。一方、教員にとっては学生ごとの実習前に評価が低い項目を理解でき、一人一人の学生の学習状況に合わせたアプローチが可能となると考えられる。

評価項目ごとの平均値を見ると、コミュニケーションや倫理的課題に関する項目は実習前評価においても比較的肯定的評価となっていた。これは、当該実習のみならず、様々な実習を通して身につけていくことができる要素を含んでいるため実習前から自己評価が高かったものと考えられる。

2. ルーブリック評価尺度使用の有無による自己評価の差

従来の実習評価票を用いた実習後評価では、「できた」の基準である3点を下回った項目として「効果的な社会資源の活用に向けた援助の実施」や「在宅サービスの種類及びその役割・機能の理解」があった。しかし、ルーブリック評価尺度を用いた実習後評価における平均値では、いずれもこの基準を上回っていた。実

習では必ずしも受け持ちの高齢者が退院に向けた支援を受けている状況にあるとは限らない。したがって、受け持ちの高齢者を通して退院への支援が行えなかった学生は「できなかった」と評価しやすい。その点今回作成されたルーブリック評価尺度は、効果的な社会資源や在宅サービスについて理解しようとする学習姿勢(カンファレンスでの意見交換を含む)が評価基準となっている。つまり、評価項目の内容を実施したかといった経験を問うのではなく、学生自身の学習の程度や他学生の経験した支援の共有など、学生の努力によって自己評価が向上しやすい評価基準となったものと考えられる。

さらに全ての評価項目において、ルーブリック評価尺度使用の有無による自己評価の差をWilcoxonの符号付き順位検定により確認した結果、「加齢に伴う身体的、心理的变化の理解」「疾病・障害レベルの理解と看護上の課題の特定」「老年期にある人のコミュニケーションの特性の理解」の3項目では有意差がみられなかったが、それ以外(12項目中9項目)では有意差をみとめた。つまり、この3項目以外は評価がしづらかったものと考えられる。有意差を認めた評価項目は「生きがい」「自己決定」など抽象度が高い項目や、対象高齢者によっては援助実施が難しい「家族支援」「社会資源活用」「在宅サービス」など家族の面会の頻度や退院の目処がついているかに影響される項目であったため、肯定的評価がしづらかった可能性があった。

また、従来の実習評価票は目標だけを示した採点指針ルーブリックの形をとっていた。ダネルら(2015)は採点指針ルーブリックの使用は、抽象的項目の判断が可能な大学院生に用いることを推奨している。したがって、学部学生には明確な基準で評価できる尺度を用いることが望ましいと言える。

3. 学生評価と教員評価との差

当該実習終了時の学生の自己評価と教員の評価の比較では、「家庭や社会における役割と生きがいの理解」「老年期にある人の生活習慣、自己決定を尊重した援助の実施」の2項目で有意差をみとめた。これについては教員が評価している学生の援助を学生自身が意図的ではなく無意識に実施しているか、重要な事項と考えていない可能性がある。したがって、学生が実施できている援助について意識化できるような関りや重要性を理解できるようカンファレンスで取り上げ学生の援助を評価していくなどの実習中の教員の関わりが重要だと考える。

杉森(2000)は、看護学実習における教員の役割として、学習の継続に向けた学生への支援や看護現象の教材化を挙げている。看護学実習は青年期にある多くの学生にとって学習継続の危機ともなり得る重大な経験であり、支援が必要である。教員の支援は学生の学習上の困難な状況をフォローするだけでなく、できている部分を認めていくことにより学生の自己効力感を高めしていくことがより重要である。また、看護現象の教材化とは、実習において生じる具体的な看護現象を用いて看護の本質を理

解できるよう強化することである。これについても学生がうまく実施できている部分を具体的に挙げ、抽象的と思われる評価項目を具体化することによって学習課題を明確化していくことが必要であろう。

4. 今後のルーブリック評価尺度の活用可能性

ダネルら(2015)はルーブリックの効果について、①タイミングの良いフィードバック、②学生による詳細なフィードバックの活用、③批評的思考力のトレーニング、④他者(教員同士)とのコミュニケーションの活性化、⑤教員の教育技法の向上、⑥平等な学習環境作りの6点を挙げている。

学生評価と教員評価との差の項で述べたように、学生が自身の行っている援助について適切に評価できるよう支援していくことが教員の役割として重要である。前山ら(2016)は、実習1週目の学内実習日において施設紹介、体験した看護の紹介、ポートフォリオ整理、ルーブリックを使用した中間評価と目標設定の確認を行い、学生・教員間の実習評価のずれはなかったという結果を得ている。ルーブリック評価尺度は最終評価としてだけでなく実習期間中にタイミング良くフィードバックするツールとしても有用である。

また、ルーブリック評価尺度自体を実習時に取り上げ学生と議論することで学生の達成すべき目標の理解は進むであろう。批評的思考力については、看護学教育における達成すべき目標として重要である。ルーブリック評価尺度を使用して批評的思考力を伸ばす最大の方法は課題に取りかかる前に学生と議論することだとされる。したがって実習の初期に議論の機会を設定することが効果的と考えられる。木下ら(2015)は、実習1週目の学内実習日において実習の意義をKJ法で整理し図解としたものを用いてルーブリック評価指標と照合し発表することで議論の機会を作っている。今後はこうした事例を参考にしながら、当該実習の特徴を踏まえて学生が主体的に学べるきっかけとなるようルーブリック評価尺度を活用していきたいと考える。

さらに、実習という場での学習は学習する場や援助の対象者、評価する教員がグループによって異なる。したがって、実習を担当する教員同士が共通理解でき学生に対する公平性を保つ上でもルーブリック評価尺度は有益である。またこのツールについて教員同士が討議を重ねることにより、教育やその技法に関するコミュニケーションが活性化し、教育成果につながる可能性がある。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は1教育機関を対象とした調査であり、本研究結果を一般化することは難しい。しかしながら、看護学実習を実習前後で評価し、既存の評価票とルーブリック評価尺度を用いた評価を同一学生対象にデータ収集し比較した結果はこれまでになく、非常に有益な資料であるといえる。今後はルーブリック評

価の教育的効果を最大限発揮できるよう、その使用方法を検討することで教員の教育技法の向上、教育成果の向上を図り評価していくことが課題である。

Ⅶ. 結論

健康障害のある高齢者に対する看護学実習のパフォーマンス評価に向けたルーブリック評価尺度の使用の有無による実習前後の学生の自己評価を比較し、学習への影響、教育活動の改善点を検討した。

1. 実習前後での学生の自己評価はルーブリック評価尺度使用の有無を問わず全項目で有意に向上した。

2. ルーブリック評価尺度使用の有無による評価の比較では、12項目中9項目で有意差を認めた。その項目は抽象度が高いか、対象高齢者によって援助実施が難しい項目であり、詳細な評価尺度がないと肯定的評価がしづらかった可能性があった。

3. ルーブリック評価尺度では項目内容を実施したかといった経験を問うのではなくカンファレンスでの意見交換を含む学生の学習姿勢を評価基準とした。したがって、学生の実習における受け持ち対象者の違いによる経験差ではなく、学生の努力の程度による評価がしやすかったものと考えられた。

4. 実習終了時の学生の自己評価と教員の評価の比較では、2項目で有意差を認め、教員の評価より学生の自己評価のほうが低い傾向が見受けられた。これは学生が自身が実施できている援助について適切な評価をしていないために起きたものと考えられる。学生が自身の援助について意味づけられるよう、教員の評価を学生に伝えていくことが重要である。

5. 今後、ルーブリックの教育的効果を最大限発揮できるよう、ルーブリック評価尺度を活用していくうえでの教員の教育技法の向上に向けた検討が必要である。

謝辞

本研究を行うにあたり、快くご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。また、英文校正を行っていただきました Editage (www.editage.jp) のご担当者様に感謝いたします。

参考文献

- 石川倫子. 看護学教育におけるパフォーマンス評価. 看護教育. 2014, vol.55, no.8, p.692-697.
- 沖裕貴. 大学におけるルーブリック評価導入の実際－公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して－. 立命館高等教育研究. 2014, no.14, p.71-90.
- 木下香織, 栗本一美, 丸山純子, 古城幸子. 看護学生がとらえた「サテライト・デイ」の意義と実習時期による学習到達度の相違－KJ法を用いたグループワークの成果をルーブリック評価指標と照合して－. 新見公立大学紀要. 2015, vol.36, p.27-34.
- 杉森みどり. 看護教育学. 第3版, 東京, 医学書院, 2000, 444p., ISBN4-260-34357-2.
- 高木初子. 老年看護学において学生が身につけた実践知としての看護援助能力-意識的な振り返りを通して, 自治医科大学看護学部紀要. 2003, vol.1, p.55-67.
- ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ. 大学教員のためのルーブリッ

ク評価入門. 初版, 東京, 玉川大学出版部, 2015, 180p., (高等教育シリーズ163), ISBN 978-4472404771.

長井栄子, 井上映子. 認知症高齢者を対象とした介護老人保健施設実習における教員の指導内容の検討. 城西国際大学紀要. 2012, vol.21, no.1, p.69-82.

前山直美, 石川智子. プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックの導入効果. 神奈川歯科大学短期大学部紀要. 2016, vol.3, p.7-14.